



熊本県版  
No. 250

治安維持法犠牲者  
国家賠償要求同盟

熊本県本部

〒862-0954

熊本市中央区神水

1-30-7 コモン神水

☎096-381-1807

### 運動の基本

- 一、 治安維持法体制の復活に反対する。
  - 二、 国は戦前の治安維持法が人道に反する悪法であることを認めること。
  - 三、 国は、治安維持法の犠牲者に謝罪と賠償を行うこと。
- ふたたび戦争と暗黒政治を許さないために

「戦争できる国」から「戦争する国」に突入した岸田政権

# 憲法無視した大軍拡・大増税政治許すな！

今こそ「再び戦争と暗黒政治を許さない」国賠同盟出番のとき

3月24日に開催された国賠同盟中央常任理事会では、岸田自公政権が乗り出した「戦争する国づくり」がすでに沖縄県石垣島の自衛隊新駐屯地の建設と長距離ミサイル（敵基地攻撃能力をもつ）配備の強行など南西諸島ではすでに着々と具体化されている実態がリアルに報告され、真剣な議論が交わされました。

討論では、アベ・スガ政権の約十年間で秘密保護法、共謀罪法、戦争法、土地利用規制法など「戦争ができる法整備」

はほぼ完成され、その上に立って今、岸田政権はいよいよ軍事費に5年間で43兆円も注ぎ込んで一気に「戦争する国づくり」に突き進んでいるという危険極まりない事態にあることを確認し、今こそ、「再び戦争と暗黒政治を許さない」をスロークアンに半世紀以上にわたって闘ってきた治安維持法国賠同盟の真価が試されるときであることを意思統一し、別項の全同盟員への「緊急アピール」を採択しました。（次頁参照）

## アピール

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟の会員のみなさんへ

## 「国賠署名・会員拡大の自主目標達成・特別期間

（4月1日～6月31日）を成功させましょう！

2023年3月24日 中央常任理事会

会員のみなさん

日頃のご奮闘に敬意を表します。

本日開かれた中央常任理事会は、第40回大会決定実現のために国賠署名と会員拡大の自主目標達成めざし、「特別期間」を設定しました。

岸田政権の「戦争する国づくり」への暴走をストップし「再び戦争と暗黒政治を許さない」同盟の使命はいよいよ明確になつていきます。映画「伊藤千代子」第3次上映運動と結んで、同盟は多くの国民や団体と力を合わせ奮闘することが強く求められております。

会員のみなさん

1. 5月16日（火）、第50回目の国会請願行動日です。3月1日現在の到達点は、個人、団体合わせて55,78

0筆、15.9%です。国会請願の成功めざし、請願署名の各県・支部の自主目標達成のために全会員が「1人5筆・10筆」など、運動の輪を大きく広げましょう。

2. 会員拡大の自主目標達成に全力を尽くすことを訴えます。

6月7日には、全国大会に次ぐ重要な全都道府県代表が参加する、中央理事会が開かれます。第40回大会決定「一日も早く2万人の同盟を建設する」目標の実現めざし、各県・支部が自主目標達成のために大いに力を尽くすことを呼びかけます。会員の「5人拡大は『不屈』紙上に氏名公表、10人拡大は『不屈』紙上に氏名公表と記念品を贈呈」の顕彰活動にたくさんのみなさんがチャレンジすることを呼びかけます。

会員のみなさん

情勢は、「戦争か平和かをめぐって」緊迫しております。今こそ、治安維持法下の弾圧に屈せず、戦争反対、社会変革のために奮闘した先人たちの「闘いと抵抗の歴史」に誇りと確信をもって、大軍拡、憲法改悪を阻止し、平和と人権輝く世界と日本をつくるために頑張ろうではありませんか。

以上

## 50回目の国会請願、大きく成功させよう

### 4月いっぱい、署名集めに全力を

今年の国会請願行動は5月16日（火）に決まりました。今回は第50回目の請願行動となります。ぜひ、大きく成功させましょう。

ただ、署名行動はいつせい地方選挙などもあって例年に比べて大きく立ち遅れており、のこり一ヶ月間の取り組みが極めて大事になっています。

県本部に届いた署名数は3月末現在、個人が548筆、団体が4筆で、自主目標に対し11%にしかありません。

すべての同盟会員が、同封の黄色い署名用紙をもってまず家族に、そして周りの友人、知人に訴えて3筆、5筆と署名を集め、4月末日までに県本部に返送していただきますようお願いいたします。

参加希望者は県本部まで申し出て下さい

なお、今年の国会請願行動に熊本から誰が参加するかまだ決まっておりません。旅費をはじめ必要経費は県本部が負担します。同盟会員で参加を希望される方があれば、県本部まで申し出てください。

ご連絡は、小田（090・5380・9451）又は関根（090・1366・5004）まで。

#### 寄稿

### 難病の妻と生きる

～感謝の思いは日々募りて～を読んで

人吉球磨支部 吉岡 弘晴

『熊本民主文学』（2023年第29号）に上田精一さんが妻のゆ子（みちこ）さんの介護の日々を綴っています。

一章「おんぶに抱っこ」の日々。二章「根を下ろし根を張って」。三章「様子！お父さんのまたどなりよらずぞ」。四章「胃瘻は絶対せんぞ！」子らと対立。五章「緑ヶ丘荘の愛に包まれ妻は生きる」から構成されています。

冒頭、「妻、廸子との終の住処が島原半島の南部の口之津町になろうとは夢にも思わなかった」と書かれています。

そこは次女の祥子（しょうこ）さんの嫁ぎ先「眞浄寺」で、住職の十方（じゅつぽう）さんが「三世代生活は楽しみましよう。両親が早死にでしたけん実の親と思うておつきあいさせてもらいます。人吉におるつもりで自由気ままにどうぞ」と迎えて下さいました。とても恵まれた移住でした。

五年前のその頃、廸子さんはまだ要介護Ⅰだったのですが、現在は要介護Ⅴになって「うれしいとき、楽しいとき、オーツ、オーツという声を発することと笑みを返すことだけが妻の意思表示になってしまった」とのこと。

上田精一さんは「結婚以来半世紀、自由奔放に生きてきた私を支えてくれたのは妻であった。妻ありてこそその教職の日々であったし、定年後傘寿を迎えるまで気ままに生きてくれたのも妻がいたからだ」と本気でそう思う」と述べています。また、「私のこれまでを知る人吉球磨の飲み友だちは異口同音に言う。『これまでさんさん廸子さんに苦労を掛けてきたっじやら。恩返し！恩返し！』と。まったくそのとおりだ」としきりに反省されています。

しかし、廸子さんが、リハビリ施設に出かける時間などを

利用して治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟長崎県本部が中心になって取りくんた『わが青春つきるとも〜伊藤千代子の生涯』の上映運動を成功させるなど長崎県映画センター理事として地元の映画・平和運動に取りくむなどめざましく活動されています。

私が、この手記を読んで一番考えさせられたのは「胃瘵（いろいろ）の件でした。

実は私も「もしもの時に備えて」と題した覚書に「胃瘵など延命治療はしないこと」と書いて家族に渡しています。

胃瘵は絶対認めんと言う父親に対して横浜にいる長男の哲也さんから「お父さん！お母さんを衰弱死させてよかかね。

……胃瘵すればお母さんの笑顔に会える。決断してよ。頼むバイ」と電話がかかってきます。祥子さんはもちろん長女の暢子（のぶこ）さんも「少しでも長生きしてほしい」と言います。結局、押し切られて胃瘵が増設されます。

ところが口からも流動食や好きなビールもスプーンで飲むことができるかと書かれていて驚きました。

いま廸子さんは要介護Ⅴですが、とても幸せな世界に生きておられるのではないのでしょうか。

### 治安維持法犠牲者の顕彰

## 『新興教育運動と田代官次』連載にあたって

編集部より

この連載は、故梶原定義氏により、1993年12月19日から翌年3月13日号の12回にわたって『熊本民報』に連載され、1996年小冊子にまとめられました。

小冊子が出版されずで26年余りが経過します。私も貴重な1冊を保管していますが、多くの人はその存在すら知らないのが実情でしょう。

田代官次氏は1985年まで熊本で党活動の要職を歴任されてきましたので、面識のある方も多数いらっしやるのではないかと思います。感想や思い出などお寄せいただければ幸いです。

## 新興教育運動と田代官次 (その1)

### はじめに

私は、いま共産党熊本県委員会図書室と資料室の整備を手がけている。若い活動家の学習と研究の便に供しようというものである。これらの書籍や資料の中に故西里竜夫同志をはじめ、先輩達が収集した膨大な未整理の資料がある。西里同志はかつて、熊本社会運動史研究会を主宰し、22号まで発行した「会報」に戦後の社会運動の歴史を執筆し、そのかわら「熊本の革命的伝統」「熊本の進歩と革命の伝統」というパンフレットをまとめた。しかし彼はその他の多くの進歩的、革命的運動を文章としてまとめえずしてこの世を去った。彼の部屋には膨大な資料とともに多くの未完の原稿が残っていた。私はこれらの資料に目を通しながら、有名無名の先輩達の知られざる不屈のたたかいを発見した。私は西里同志が果たせなかった「志半ばにしてこの世を去った多くの有名無名の先輩たちのたたかいを文章としてのこす仕事」をひきつぐ重要性を痛感し、誰かがこれをしなければならぬと思っていた。それが私にまわってきたのである。以上がこの小文をまとめることになった経緯である。最初に故田代官次氏の活動をとりあげることにしたのは、彼の業績の大きさにもかか

わらず、自分をひけらかさない彼のその奥ゆかしさも手伝わ  
てか、党内外にあまりにも知られていないことを知ったから  
である。

なお、まとめるにあたって熊本近代史研究会の上田穰一氏  
の研究、鹿児島大学教育学部の池田智恵子氏の論文などに大  
いに啓発されたことを付言しておきたい。また、煩雑さを避  
けるため、文中の敬称はすべて省略させてもらった。

一九九三年十二月十九日

著者 梶原 定義



在りし日の田代官次夫妻

## 一、僻地の小学校への赴任

日本帝国主義がその侵略戦争に敗北した年の一九四五年十  
一月六日、熊本にはじめて日本共産党の組織が日本共産党熊  
本地方委員会として創立された。創立大会に参加した七人の  
なかに田代官次がいた。

一九三〇年代のはじめ日本帝国主義が中国侵略を開始した  
ちようどそのころ、天皇制下、治安維持法による過酷な弾圧  
のなかで、彼は社会の変革の必然性を確信し、科学的で自主  
的な教育実践と侵略戦争に反対する活動に献身した数少ない  
青年教師の一人であった。そして、一九三三（昭和八）年十  
二月、四才と一才五ヶ月の子ども二人を抱えた妻とともに逮  
捕され、懲役二年六ヶ月の判決を受け刑務所に送られた。出  
所後も特高の監視のもとで、苦難に満ちた活動を続け、終戦  
と同時に教職員組合を組織するとともに熊本県の党組織創立  
に参加したのであった。以来四十年間、田代官次は熊本県の  
共産党組織の幹部の一人として、党の指導に当たり、他方、  
熊本民主商工会の幹部として、中小業者の営業と生活を守る  
活動に献身した。温和な人柄、地道な活動、そして日本の変  
革の道を語りかけるその穏やかな語り口は多くの人々の尊敬

を集めた。一九八五（昭和六〇）年十月二十六日、八十才でその波乱の一生を終わった。日本共産党熊本県委員会は県党葬をもってその輝かしい業績を讃えた。

田代官次は一九〇六（明治三九）年、菊池郡加茂川村（現七城町）で郡役所吏員兼自作農の三男として出生。加茂川小、合志義塾をへて熊本第二師範学校を卒業。迫間小（現菊池市）をはじめに原水（現菊陽町）、中原（現阿蘇郡）、錦野（大津町）の各小学校を経て阿蘇郡黒川小学校の教師を勤めるようになった。

官次が迫間小学校から原水小学校に転勤する一九二七（昭和二）年三月金融恐慌が発生し、翌二八年にはニューヨークの株が大暴落し世界恐慌に発展した。コメの価格は半分に暴落。農村には飢餓同様の農民が満ち、東北では「娘の身売り」が続出した。

労働者、農民のたたかいが発展し、労働組合をはじめ各種の大衆組織が創立された。一九三〇年、教育の分野でも先進的な教育者によって「新興教育研究所」が創立され、雑誌「新興教育」が創刊された。

官次は主として小学校四、五年を受け持ったが弁当を持つてこない児童、赤ん坊を背負って登校するものが少なくなかった。官次は弁当を食べている自分に向いた児童の視線を感じ、あるいは授業中に泣き出す赤ん坊を廊下に出てあやしなから話を聞こうと努力している子どもをみては強く胸をいためた。欠食児童に自分の弁当を分け与えたり、赤ん坊を背負った児童を励ましたりしたが、もちろんそんなことが問題の解決につながるものではなかった。

## 二、科学的社会主義との出会い

大恐慌による農民の窮乏化は教職員の生活にも深刻な影響を与えていた。教職員の給与引き下げ、人員整理が全国的に広がり、熊本県でも三一年七月一日から減俸が実施された。また、給与の不払いや強制寄付が全国的に行われた。そのうえ菊池郡、阿蘇郡、天草郡などの小学校では教員の給与三ヶ月分不払いなどが発生した。「子どもの葬式も出せない」教員がいたと当時の九州新聞（現・熊日）が報道しているほどであった（熊本県史「四」四七六頁）。



第二師範入学当時

第二師範は自宅からの通学も許可されており、校長は自由時間を重視していた。同窓に林田茂雄（故人・八代郡鏡町出身、労働者教育協会講師、哲学者）、岩代輝昭（故人・大矢輝昭・故人・新興教育研究

官次の両親は浄土真宗の門徒であり、とくに母親はその敬虔な信者であった。「生きとし生けるものを愛せよ」が母の信条であった。官次は母に連れられてお寺に行き、お坊さんの話を聞く機会が多かった。合志義塾に通うようになってからも何回もお寺に通い、お坊さんの話を聞いた。「浄土真宗と母の愛情が私に『人を愛せよ』というヒューマニズムの心をうえつけたのかも知れない」と彼は語っている。

ついで第二師範学校時代の比較的自由な学校の空気が官次に自由と真理を追求しようとする思想をうえつけたように思われる。

第二師範（一九一四年＝大正三年創立）は第一師範より遅れてできた学校であったし、大正デモクラシーの影響もあつて、比較的自由的な空気があった。第一師範の全寮制に比べて

所創立者の一人、阿蘇郡白水村出身）など進歩的なインテリゲンチヤが育っていることもこの学校の空気と無関係ではあるまい。

しかし官次の「ヒューマニズム」も目の前の児童たちの貧困や、自分を含めた教師の生活問題を前にして全く無力であることを知り、前にもましていろいろの文献を読みあさり、「いかに生きるべきか」を模索し続けた。

街の書店には左翼文献が並んでいた。彼はロシアの革命に関心をもっていた。そのロシア革命の指導者レーニンの伝記（クルプスカヤ著・レーニン伝）を読み感銘をうけ、さらに「中央公論」「改造」など、ついで「戦旗」を購入するようになった。その頃、友人の岩代（前記）やプロレタリア科学同盟書記をしていた林田（前記）らと連絡がとれ、彼らの影響をうけた。「第二貧乏物語」「弁証法的・史的唯物論」「資本論」などを読んだのもこの頃である。

こうした文献の学習は農村と児童の貧困と教師のきびしい生活の現状に強く悩み、矛盾を感じていた官次の目を少しずつ開かせていった。そしてついに、彼の転換期がやってきた。

（次号に続く）